

3) 長期経過観察中に、口腔粘膜前癌病変から粘膜癌の発生を繰り返した2例

芳澤 享子・高田 真仁
野村 務・河野 正己 (新潟大学歯学部)
新垣 晋・中島 民雄 (口腔外科)

広範性や多発性の口腔粘膜前癌病変は、発癌の可能性が高いと言われている。今回我々は、長期間にわたりそのような前癌病変から粘膜癌の発生を繰り返した2例を経験したので報告する。症例1；84才，女性。平成3年7月初診。臨床診断右側上顎腫瘍。腫瘍の周囲歯肉や頬粘膜に広範な白色病変を認めた。切除術を施行し病理診断は乳頭腫症であったが、その後白色病変部から腫瘍性病変が繰り返し出現し、病理診断にて平成3年6月に上皮異形性、10月に疣贅性癌、平成8年12月と平成9年2月に扁平上皮癌、平成9年4月に疣贅性癌を認めた。症例2；61才，女性。昭和52年当科初診。舌扁平上皮癌にて治療を行ったが、その後近接した部位に白色、赤色病変が繰り返し出現し、昭和60年9月以降上皮形成の病理診断を得ていたが、平成4年5月に舌扁平上皮癌、平成8年4月に下顎、11月に口底扁平上皮癌が認められ、いずれも白色病変がそれらに先行していた。

4) 頬粘膜扁平上皮癌の臨床的検討

石原 修・又賀 泉
武田 幸彦・岡野 篤夫 (日本歯科大学新潟)
森 和久・土持 真 (歯学部口腔外科)

頬粘膜扁平上皮癌一次症例について臨床的検討を行った。〈対象、結果〉対象は1981年から1995年の過去15年間に当科で治療した14例で、性別では、男性11例、女性3例と圧倒的に男性が多く、年齢では60歳代が8例、50歳代が4例、70歳代が2例の順であった。TNM分類では、T1：3例、T2：5例、T3：1例、T4：5例で、N0：7例、N1：4例、N2：2例、N3：1例で全例M0であった。治療は化学療法＋放射線療法＋手術療法を選択したものが9例で、うち8例に対しD-P皮弁、大胸筋皮弁、広背筋皮弁、前腕皮弁により再建を行った。これら9例中1例に4年3カ月後に局所再発が認められ救済手術を行ったが制御されなかった。術後誤嚥性肺炎を認めた2例のうち、1例は死亡し、1例は経管栄養を余儀なくされ術後機能に問題を残した。放射線＋化学療法を行った5例のうち、1例は姑息的に4例は根治的に行い3例は局所制御されたが、1例に放射線性骨髄炎を認め外科的処置を要した。〈結語〉大型皮弁の導入により、

進展例に対しても腫瘍拡大切除は可能となり、手術施行群の局所再発は1例であった。今後誤嚥にたいする積極的な予防策と形態機能的再建法が必要と思われる。

5) 頭頸部扁平上皮癌の節外浸潤の要因に関する臨床病理学的検討

新垣 晋・芳澤 亨子
高田 真仁・野村 務 (新潟大学歯学部)
中島 民雄 (口腔外科)

頭頸部癌の頸部リンパ節転移はその予後を左右する重要な因子であり、なかでも節外浸潤の予後は極めて不良であることが知られている。頭頸部癌の節外浸潤の頻度とその要因を知る目的で頸部郭清術を行い組織学的に転移が確認された頭頸部扁平上皮癌70症例について節外浸潤の頻度と原発部位、臨床病期、郭清時期、転移リンパ節数、転移レベル、分化度、浸潤様式、深達度との関連性について臨床的病理組織学的に検討を行った。

70症例のなかで36症例(51%)に節外浸潤があり、転移リンパ節数(1個29%、2個47%、3個以上69%)、転移レベル(Level I、II 44%、Level III、IV 70%)と節外浸潤の頻度とは関連性を認めたが、原発部位、臨床病期、郭清時期、分化度、浸潤様式、深達度との関連性は認めなかった。腫瘍再発は24例(34%)に認められ、節外浸潤症例が18例(75%)と多くを占めていた。

6) 卵巣明細胞腺癌に対するCPT-11とMitomycin C併用療法の試み

青木 陽一・今井 勤
倉林 工・児玉 省二 (新潟大学産科)
田中 憲一 (婦人科学教室)

卵巣癌に対する標準的化学療法であるCDDP-based regimen (CAP/CP)は、卵巣明細胞腺癌に対して無効と考えられ、このことが卵巣明細胞腺癌を有意に予後不良としている。明細胞腺癌の発生頻度は増加傾向にあり、有効なレジメンの開発が望まれるなか、最近CPT-11とMitomycin C (MMC)併用療法が有効であることが報告された。そこで今回当科で治療した卵巣明細胞腺癌症例3例に対し同レジメンを用いた治療を経験したので報告する。症例はIc期1例、IIIc期2例で、CPT-11 140 mg/m² (iv), days 1, 15, 29; MMC 7 mg/m² (ip or iv), days 1, 15, 29を1コースとして最低2コース施行した。前治療としてCAP療法を施行し、評価可能

病変を有する2例において1例のCR, 1例のPRの効果を得られた。副作用は1例においてGrade4の骨髄抑制, 3例においてGrade3の脱毛を認めたが, 下痢等の副作用は軽度であった。現在観察期間8~18カ月で, 2例は無病生存中, 1例は担癌生存中である。今後観察期間の延長, 症例の追加により, 本レジメンの卵巣明細胞腺癌に対する有効性をさらに検討する予定である。

7) 婦人科悪性腫瘍手術における腸切除症例の予後とQOLに関する検討

関根 正幸・青野 一則
東條 義弥・花岡 仁一 (新潟市民病院)
竹内 裕・徳永 昭輝 (産婦人科)

【目的】婦人科悪性腫瘍手術において腫瘍の腸管浸潤を認めた場合, 腸管の合併切除を施行するか否かの決断は非常に難しい。そこで我々は, 当科における初回手術時の腸切除症例において検討を行った。【方法】婦人科悪性腫瘍手術症例5例(卵巣癌3例, 子宮体癌1例, 子宮肉腫1例)について, 化学療法の遂行度, 術後合併症, 食事摂取状況, 在宅期間, PSの推移, 予後につき検討を行った。人工肛門造設が3例, 端々吻合が2例であった。【成績】4例は約1年の経過で死亡, 1例は担癌中であるが3年5ヶ月生存中である。腸切除のため目的化学療法が施行できなかった症例はなかった。術後, 排尿障害を1例, イレウスを1例に認めた。食事摂取, 在宅期間からみたQOLは全ての症例で良好であった。手術の影響によると考えられるPSの低下を認めたのは1例であった。【結論】当科における各症例の検討により問題提起をしたいと考えている。今後SLOでの腸切除症例も含めた検討をしたい。

8) 当科で取り扱った若年子宮体癌9症例の臨床的検討

笹川 基・松下 宏
菊池真理子・遠藤 道仁 (県立がんセンター)
本間 滋・高橋 威 (新潟病院産婦人科)

子宮体癌は比較的高齢者に発生することが多く, 40歳以下の若年者での発生は稀だが, 若年体癌では妊孕性温存が望まれることもあり, その取り扱いには細心の注意を要する。昭和57年から15年間に当科で取り扱った若年子宮体癌9例を臨床的に検討し, 以下の成績が得られた。

- 1) 若年体癌は全体癌中3.9%を占めていた。
- 2) 8例が未産婦であり, 月経周期は7例で不整であった。主訴は不正性器出血が多かった。
- 3) 術後病理検査では, 9例すべて類内膜癌であり, 高分化型腺癌8例, 中分化型腺癌1例であった。全例で子宮筋層浸潤がみられたが, 1/2を越える浸潤は1例だけであった。リンパ節転移は1例のみであった。手術進行期分類はIb期7例, IIIa期1例, IIIc期1例である。
- 4) インフォームドコンセントの結果, 子宮を温存した症例はなく, 全例に子宮摘出術などを行い, 5例に術後化学療法, 4例にホルモン療法を行った。全例無病生存の状態である。

若年体癌はホルモン異常を背景に発生することが多いと考えられ, 予後良好な傾向が認められた。今回の症例中には, 高分化型腺癌で画像診断では子宮筋層浸潤の所見はなく, 子宮温存も可能と考えられたが, 摘出標本で筋層浸潤が認められた症例がある。子宮温存療法の選択には慎重な判断が必要と思われた。

9) 前立腺癌に伴う γ Sm/PSAの変化

西山 勉・照沼 正博 (長岡中央総合病院)
泌尿器科

【緒言】前立腺癌(CAP)治療に伴う前立腺特異抗原(PSA)の変化の観察は重要である。非結合型PSA比率がCAP早期発見に有用であるとの報告が散見される。 γ Smは非結合型PSAを測定しているとされる。【方法】CAPの内分泌療法に伴うPSAの変化を γ Sm/PSA比率で検討した。【結果】治療開始症例では治療開始前と2週間後と比較すると, 限局癌症例で有為な γ Sm/PSA比率の上昇を認めた。転移症例は限局癌症例に比較してその上昇は軽度であった。組織分化度が高いほどその上昇は高度であった。抗アンドロゲン除去症候群発現症例でもPSA低下に伴って γ Sm/PSA比率の上昇を認めたが, デキサメサゾン有効症例では一定の傾向を認めなかった。再燃症例ではPSA上昇に伴って γ Sm/PSA比率の低下を認めた。【結語】治療に伴う γ Sm/PSA比率の変化はCAPの治療に対する反応性の指標になりうると考えられた。